

日本人の中国観

——内藤湖南と吉野作造の場合——

山 根 幸 夫

一

日本は中国とは隣国であり、しばしば「同文同種」の邦といわれ——厳密には同文でも同種でもないが——、古くから中国文化の影響を強く受け、大きくいえば中国文化圏の中に含まれていた。勿論、日本独自の文化もあったけれども、日本の文物・制度の多くに中国のその強い影響が見られる。殊に徳川時代には、その封建支配体制を合理化するための思想として、儒学が従来以上に権威をもつようになったが、儒学者はその思想の発生地である中国に対し、また中国文化に対して、一そう強い憧憬を示すようになった。荻生徂徠のごときは、自ら姓名を中国風に「物徂徠」あるいは「物茂卿」と称したことは、有名な事実である。このように歴史的に長い間、中国を崇拜してきた日本人が、中国を軽蔑し、中国人を劣等視するようになったのは、明治以降、日本が西洋文化を摂取するようになり、これに傾倒するようになった結果である。この後、日本の近代化のためには中国とは訣別すべしという意見さえ出現した。一八八五年の福沢諭吉の『脱亜論』¹⁾の如きは、まさにそれであった。このような中国に対する侮蔑感は決して日

清戦争の勝利によって起ったものではなく、それ以前からすでに存在していたのである。例えば、日本の新聞紙上には、中国人に冠するに「豚尾」とか「ちゃんちゃん」という卑称が用いられていた。雑誌『日本人』のごときも（一八八八年十一月）、中国人労働者を「利のためには鞭撻侮辱も甘んじて之を受け、恬として人間に尊重すべき権利および栄誉あることを知らざるものの如し、是れ何ぞ禽獣に異ならんや」と畜生視し、また出稼ぎ華僑は「目に一丁字を解することなく、道德の何物たるを弁ぜ」ず、「斯くの如き徳義なき廉恥なきの賤民が、我国の内地に闖入し蔓延したらんには、種々の言ふべからざるの悪徳を伝播し、我国の風俗を壊乱するに至るべし」とさえ言っている。⁽²⁾このような中国人に対する蔑視感は、欧米人が日本人を「卑視して敢て同等視」しないのと同じ心理だと、一八七七年の『横浜毎日新聞』は指摘している。⁽³⁾それ故、日清戦争が勝利に終わった後は、日本人の中国および中国人に対する蔑視の風潮は、一そういちじるしくなり、日本人の中国観を決定的に変える転機となった。それまではなお知識人の間には、中国を尊敬する気持もあったが、日清戦争を境として侮蔑感は決定的となり、「チャンコロ」の蔑称が一般化するようになった。一般日本人はもっぱら欧米にのみ眼をむけ、東亜には次第に無関心になっていた。日本人の中国への侮蔑感と無関心とは、日本の「近代化」の進行と併行していたのである。それ故、日本の「近代化」が進めば進むほど、中国への侮蔑感はたかまり、更に中国への侵略政策が促進されていった。そのような時点における、中国を研究対象としていた代表的な日本人の中国観を考察してみたい。そのために、私は歴史家内藤湖南と政治学者吉野作造とを採りあげることにした。

註

- (1) 福沢諭吉『脱亜論』の全文が、竹内好編『アジア主義』（現代日本思想大系9）の解説部分（三八―四〇頁）に引用されて

いる。

(2) (3) 臼井勝美「日本と中国——百年の歩みの中で——」(『講座中国』V、日本と中国所収)。

二

まず、内藤湖南および吉野作造の、中国とのかかわりあいについて略述しておきたい。内藤湖南(一八六六—一九三四)は、秋田県毛馬内町に生れ、秋田師範学校を卒業し、一時小学校教員をしていたが、後上京して記者生活に入り、一八九八年には『万朝報』に入社、主筆となった。その翌年、中国各地を遊歴し、すこぶる中国に関する興味をふかめ、爾後中国研究に全力を注ぐようになった。この際の彼の中国旅行記が『燕山楚水』である。一九〇〇年大阪朝日新聞に論説委員として再入社⁽¹⁾、一九〇二年には又華北・満州各地を視察したが、当時満州には義和団の乱の後、ひき続きロシア軍が進駐していた。この実情は湖南の日本人としての感情を相当刺激したらしい。それ故、日露の風運が急を告げるや、彼は率先して開戦論を主張した。一九〇五年、日露戦争の終わった直後、外務省の依頼に応じて満州の占領地調査に従事し、翌六年にも再び外務省嘱託として、満州・朝鮮の各地を視察した。今や中国学者としての湖南の学識は、学界でもひとしく認めるところとなり、一九〇七年、京都大学講師に招かれて東洋史を講ずることになり、翌々年には教授となり、京都大学の東洋史学科の創設者として、多くの業績をあげると共に、多数のすぐれた門下を養成した⁽³⁾。その中国観を展開したものに、『支那論』(一九二三)、『新支那論』(一九二四)などがある。

一方、吉野作造(一八七八—一九三三)は、宮城県古川町に生れ、第二高等学校在学中に尚綱女学校長ミス・ブゼルのバイブル・クラスに出席、キリスト教への関心をたかめ、一八九八年、北一番丁の浸礼教会で受洗した。以後、

彼の思想と行動には、キリスト教が大きな影響力をもつようになった。一九〇四年、東京大学法学部政治学科を卒業して後も、大学院で研究生生活をつづけていたが、実家の経済的窮迫から法学部教授梅謙次郎の勧めにより、清朝政府の実力者袁世凱の息子、克定の家庭教師として天津に赴任するに至った。ここに吉野と中国とのつながりが生じた。ところが、袁家からは約束とおりの給与は支払われず、やむなく北洋法政専門学堂の教官として生活を維持することになった。一九〇八年、光緒帝、西太后が相次いで死亡した結果、袁世凱も失脚するに至ったので、吉野も満三カ年にわたる滞清生活に終止符を打って、一九〇九年初めに帰国した。それから間もなく、東京大学助教授に就任（政治史を担当）、翌年から三年間欧州へ留学した。当時、吉野の研究対象は、①欧米政治史 ②東洋政治史（殊に中国）③日本政治史（殊に明治期）の三方面に向けられていた。⁽⁶⁾ 彼が中国に積極的に関心を抱くようになったのは、辛亥革命が失敗して、多くの革命派政客が日本に亡命し来り、彼らとの接触が始まった結果であった。その中国への関心の契機について、「初めて最近の支那に一つ大いに勃興する所の大精神があることを知りました。それから大いに感激する所があって、支那の事物を研究し初めたのであるが、之は実に大正三年の春頃から事でありま⁽⁷⁾す」と吉野自ら語っている。一九一五年には既に『日支交渉論』を書き、同じく一七年には『支那革命小史』を刊行して⁽⁸⁾いる。他方では、中央公論の主幹滝田⁽⁹⁾樗陰の求めに応じて、中公誌上に堂々の論陣をはり、政府の対華政策についてもしばしば筆誅を加えた。一九二三年の関東大震災の際における、在日朝鮮人や社会主義者に対する虐殺事件についても、厳しく政府に迫った。翌二四年、東大教授を辞して朝日新聞に入社したが、枢密院を攻撃した論文を発表したため、当局の忌避にふれて間もなく退社を余儀なくされた。以後、吉野は講師として再び東大研究室へ戻り、新聞雑誌研究室を主宰し、明治文化の研究に全精力を注ぐことになった。なお、この頃から彼のジャーナリストとして筆力は次第に衰え、日本の軍国主義化、ファシ⁽¹⁰⁾シヨ化の波の高まる中で、五十六歳の生涯を閉じた。

註

- (1) 内藤は一八九四年(明治二七)一度大阪朝日新聞に入社したが、翌々九六年、松隈内閣の成立に当って退社している。
- (2) 今回の旅行手記は『禹域鴻爪後記』(清国再遊記要)としてまとめられている。
- (3) 「湖南の直系の弟子では、東洋史の岡崎文夫、経学の武内義雄、文学の青木正児、支那美術の伊勢専一郎、敦煌学の神田喜一郎などがそれぞれの分野での後継者といわれた。ほかに富岡謙蔵、石浜純太郎という暴れん坊がいる。ほかにもう一人、森鹿三という傑物があ」と、青江舜二郎は『竜の星座——内藤湖南のアジア的生涯』の中で述べている。
- (4) 内藤の伝記としては、貝塚茂樹「内藤湖南——開化した国民主義者」(朝日ジャーナル編『日本の思想家3』所収)が簡要を得たものであるが、註(3)に引用した青江舜二郎『竜の星座』もある。
- (5) 吉野の天津赴任の経緯については、田中惣五郎『吉野作造』九九―一〇四頁に詳しい。
- (6) 『故吉野博士を語る』六五頁、参照。
- (7) 『黎明会講演集』(大正八年六月)。但し、松尾尊允氏は吉野の中国研究の開始を大正五年からであるとしている。松尾「民本主義者と五四運動」(『大正デモクラシーの研究』所収)参照。
- (8) 『支那革命小史』の執筆は、頭山滿、寺尾亨らの慫慂によるものであった。吉野『講学余談』一五五頁。
- (9) 滝田は第二高等学校の出身で、吉野より五年後輩であり、秋田市の生れであったところから、吉野に親近感をもったらしい。
- (10) 吉野の伝記としては、田中惣五郎、前掲書がもっとも詳しい。『古川余影』『故吉野博士を語る』も有益である。野原四郎「民本主義者の孫文像」(思想三九六)、松尾尊允、前掲書、および宮本又久「帝国主義としての民本主義——吉野作造の対中国政策」(日本史研究九一)などもある。

三

内藤にしろ吉野にしろ、当時の日本においてはもっともよく中国を理解し、中国に親近感をもっていた中国研究者

であったといえよう。ところが、以下に述べるように両者の中国観はかなり対照的であり、相当大的食い違いが見られる。次に、中国で発生した重大事件に対して、両者がどのような見方を示したかという点について比較・検討してみたい。比較の対象とすべき事件として、私は辛亥革命と五四運動を採りあげてみることにした。

まず辛亥革命についてみれば、内藤は革命勃発の時点⁽¹⁾で、それについて多く論じているが、吉野の『支那革命小史』はやや遅れて書かれたものであるから、同じ条件で両者を比較することはできない。免に角、内藤の辛亥革命観から考察してみよう。彼は辛亥革命を清朝統一政権の崩壊と認め、清朝の滅亡は「数千年来の君主独裁制による積弊」の結果であり、不可避のものであったと考える。しかし、彼はこの革命を醸成した原動力としての孫文・黄興らの革命派（中国革命同盟会）の勢力を認めようとはしない。すなわち「近来、革命党がどさくさに紛れて大分金を拵へたので端なくも英氣が銷磨して了って、何事もする氣が無いという人もあるが、成程さうかも知れぬ」、あるいは「革命党などの様な一時に勃興した勢力は、日ならずして衰滅に帰する」かも知れないといった、革命派に対する内藤の評価は、清末の革命運動に対する理解を全然欠いたものといわねばならぬ。また、袁世凱についても、革命勃発の当初においては「袁も己に末路に瀕して居ると謂ってよろしい。……西洋人などは、どうかすると袁に望みを属して袁さへ出廬すれば、現状維持が出来る者と考へて居った者が少くない。西洋人のみならず、我邦でもこんな謬見を抱く政治家がないとも限らぬ⁽⁴⁾」と述べ、また袁は八方美人で度胸がなく、優柔不断であると評価するなど、袁が実権を掌握する可能性について全然考えていなかった。しかし、中国が軍閥対立の状態に陥ると、「支那見たやうな国は自ら自分の位地を真正に知悉したならば、政治も経済も世界各国に共通して開放する方が、却って自分の独立を確保する所以であるので、些々たる体面論などを喧しく言ふのは、全く日本などのヤリカタにかぶれた最も愚なる政策である⁽⁵⁾」と断言し、中国人民の幸福のために、列強と共同して都統政治を布くことを提案する。「都統政治の方が、国

民の独立といふ体面さへ抛棄すれば、支那の人民に取て、最も幸福なるべき境界である⁽⁶⁾」という。しかし、自国の独立を放棄した国民にどのような幸福が与えられるのだろうか。都統政治とは、要するに列強による中国の共同管理に他ならないのである。さらに、内藤は現在の中国には国家としての統一を維持することは困難である、「支那に於て生命あり、体統ある団体は郷党宗族以上には出でぬ。此の最高団体の代表者は即ち父老である⁽⁷⁾」。それ故、父老による△郷団▽政治を、中国統治の根本方針として採用せよと主張する。△郷団▽の連合体による連邦組織こそ、中国の理想的な統一形態であると内藤は考えた。父老を中心とする調和的な地方的小世界が連合することによって、中国的な近代の調和的国家が成立しうるとしている⁽⁸⁾。しかし、内藤のこのような考え方は、中国が地方分権的な状態にあることを歓迎するものであり、当時の軍閥割拠の状態を是認・肯定するものに他ならなかった⁽⁹⁾。内藤がはっきり意識したか否かわからないが、中国が分権的な状態にある方が、日本の対華政策にとっては便利であった。さらに内藤は、中国はその財政面から考えて、蒙古・満州・西藏などの周辺地域を放棄せよと主張する。「蒙古の土地が誰の領土にならうとも、西藏の土地が誰の領土にならうとも、満州が誰の領土にならうとも、漢人の平和的發展は必ずしも妨げられない。……支那の領土問題は政治上の実力の方から考へて、今日縮少すべきもの、五族共和と云ふやうな空想的議論に支配されずに、實際の実力を考へて、寧ろ其の領土を一時失つても、内部の統一を図るべき⁽¹⁰⁾」であるという。このような内藤の滿蒙放棄論の前提には、中国革命同盟会のイデオログ章炳麟の次のような主張があったと考えられる。すなわち、章炳麟は民報誌上で「中華民國の疆域から考えると、安南と朝鮮は必ず回復しなければならぬのである。ビルマは其次ぎに着手すべきものである」と主張したのに対し、日本の国益を守る立場から、朝鮮の回復の如きは論外で、むしろ滿・蒙・蔵をも放棄すべきだという内藤の発想である。これは既に日本の植民地と化した朝鮮を、あくまで保持するといふ、内藤の国益の上にたった主張で、ナシヨナリスト内藤の面目が躍如としている。

以上のような、内藤の辛亥革命の際における中国観に対して、吉野はどのような理解を示したであろうか。上述したように、吉野が中国研究に目をむけるようになったのは、大正三、五年頃で、辛亥革命前後の時点における、彼の明確な中国観はわからない。但し、『支那革命小史』によれば、彼の中国革命運動に対する見方は充分察知することができる。同書の序文では「最近二十年に互る支那の革命運動は、謂はば新支那誕生の生みの苦みである」、「中国革命小史は実に支那民族復興の努力を率直に語るものたると同時に、又何故に著者が支那民族に敬意を表するか理由を説明するものである」として、清末における革命運動が抬頭した必然性を認め、革命の正当性をはっきりと述べ、これこそ中国民族復興の途だと考えている。この点で、内藤が革命派に対して否定的であり、中国の民族的統一に対しても疑問を抱いていたのに対して、吉野の中国観との間かなり差のあることを認めなければならぬ。⁽¹³⁾ただ、両者の見解が公表された時期に、数年間のズレがあることは充分考慮しておかなければならないであろう。

註

- (1) 「革命軍の将来」(明治四四年一〇月一七、二〇日)、「支那時局の発展」(明治四四年一月一、二、四日)、「中華民國承認に就て」(明治四五年三月一八、二〇日)以上いずれも『大阪朝日』所載。「支那の時局に就きて」(明治四五年八月一日)、「支那現勢論」(大正二年七月一日)以上いずれも『太陽』所載。これらの諸論は『支那論』(大正三年)附録の中に収められている。
- (2) 内藤の辛亥革命観については、池田誠「内藤湖南の辛亥革命論」(立命館法学三九・四〇)同「辛亥革命と内藤湖南」(現代中国三七)および野原四郎「内藤湖南『支那論』批判」(中国評論一—四)などの研究がある。
- (3) 内藤の袁世凱評価については、池田誠「内藤湖南の袁世凱論」(立命館法学四四)がある。
- (4) 「支那時局の発展」(『支那論』三二〇—三二二頁)。

- (5) 「支那の時局に就きて」(『支那論』三四八―三四九頁)。
- (6) 『支那論』自叙九頁。
- (7) 『右 同』自叙一三頁。
- (8) 池田誠「辛亥革命と内藤湖南」(現代中国三七)。
- (9) 野原、前掲論文では「父老は決して郷党・宗族の共同利益を民主的に代表するものではない。反って人民の機構を自己の利益に逆用する専制的な親分にすぎない」とあり、内藤のいうように父老や郷団は中国統一に役立つものでなく、中国の封建的な支配機構を維持するのに役立ったとして、内藤の郷団論を反駁している。
- (10) 『支那論』一〇一―一〇二頁。
- (11) この点について、池田誠「辛亥革命と内藤湖南」では、「満蒙蔵放棄論を以て直ちに湖南の中国論を帝國主義侵略と直線的に結びつけるのは誤りであると思う」と述べ、内藤の立場を弁護しているが、充分な説得力はもたない。
- (12) 『中国革命小史』序(吉野博士民主主義論集『中国革命史論』に拠る)。
- (13) 吉野の辛亥革命観については、安藤久美子「同時代における日本人の辛亥革命観——吉野作造と北一輝を中心として」(史潮一〇〇)がある。

四

次の五四運動になると、両者の見解の差はさらに大きくなる。一九一九年には、五四運動の勃発する二カ月前に、朝鮮で三一独立運動が発生した。当時、中央公論などでジャーナリズムに活躍していた吉野は、中公四月号に「対外的良心の發揮」という一文を書き、日本の朝鮮統治の欠陥を指摘、さらに「誤解される点がこちらに全くないのに、

それでも朝鮮人が反抗するといふなら、日韓併合の事実そのもの、同化政策そのものが問題であらう」として、問題の核心に迫っている。それゆえ、この「暴動の原因を第三者の煽動に帰」するが如きは、誤解も甚しいものであった。「孫文はかつて従来の革命は△英雄革命▽であったが、今後の革命は△国民革命▽だといった。この見識がなければ、色々な運動を到底理解することは出来ない」とする吉野の見解は、五四運動の際にもそのまま適用されたのであった。五四運動について、吉野は何編かの論文⁽¹⁾を發表しているが、發生直後に書かれた「北京大学騒擾事件⁽²⁾」を紹介してみよう。

五四運動は従来の排日運動と異なつて、第一に全く自発的である。誰からも煽動されてはいない。日本の新聞などは、例によつて某国⁽³⁾の煽動によるものと見做すのは、とんでもない僻みだ。第二に、運動は一つの確信的精神⁽⁴⁾に基づいてゐる。その確信する目的を實現すべき肝要な事柄を正確に見定めてゐる。第三に、彼等の運動は單純に排日一点ばりでなく、先ず内部の禍根を除こうとするのが主眼である。但し、採用した手段がひどく強暴で、非文明的なのは遺憾であつた。

右のように、吉野は五四運動を外国帝國主義（特に日本帝國主義）侵略に対する防衛と、軍閥・官僚の専制支配の排撃という目的をもつた、中国国民（殊に学生・青年）の自発的な國民運動であると規定している。さらに、吉野は日本における民本主義運動（軍閥・官僚・財閥の排撃）と、中国の五四運動との連帶性を説き、そのような連帶を絆として、日中兩國人民の連帶關係を確立しなければならぬ、と主張した⁽⁵⁾。このような吉野の五四運動についての評價はきわめてすぐれたものであり、この運動が國民的な背景をもつた建設的なものであり、中国民族の自覺的な運動であることを、はっきり認めている。しかし、吉野は反面、「吾人は何処迄も北京大学学生の取つた方法に一種の反感を抱かざるを得ないことを告白する」「在留日本人に誰彼の區別なく無意味の危害を加うるに至つては、殆んど狂乱

の態と言つていい」ような暴動の形態をとつたことは「頗る憂慮すべき事柄」であり、「我々の甚だ忌々しく思う所である」といった見解をも述べている。これは彼の観念的な理解と感情的な反感との相剋を示すものであった。⁽⁸⁾このような点に、実は吉野の中国観の限界があるのであり、五四運動以後の彼の中国観が次第に後退していくようになった原因も、此処に求められるのである。宮本又久氏は、吉野の民本主義の中に帝国主義的な側面の存在することを指摘しているが、⁽⁷⁾彼の中国観の欠陥も実にこの点に根ざしているのである。最近、吉野の中国観を否定的に評価する見解も強くなったが、⁽⁸⁾当時の条件の下では、やはり吉野の五四運動観の進歩的・積極的な役割を評価する必要があるのではないだろうか。

これに対して、内藤は五四運動をどのように見ていたのであろうか。「山東問題と排日論の根底」で、内藤は次のように述べている。⁽¹⁰⁾

山東問題に就ては、支那人は頻りに大奮発をやつて居る。而も教育あり地位あり、日本に対して正当の理解ある人士までが大奮発の仲間入りをして、敵愾心を起してゐるやうである。先般かの林長民氏から「敬告日本人」と題して一冊子を送つてきた。氏は早稲田大学出身で、帰国後袁世凱時代に司法総長となつた程の、支那有数の政治家であるが、氏が北京における有力な排日思想の鼓吹者であり、宣伝者であるといふに至りては、驚かざるを得ない。

而して内藤は、これに続けて林長民の『敬告日本人』に一々反駁を加えているが、要するにそれは日本側の手前勝手な弁解にすぎない感がする。さらに、内藤は「世界大戦の数年間に支那に於ける日本の地位は、益々優越になり、世界の列強も又之を認むることになった。そこで支那人は日本の発展が氣に食はないのである」とさえ極言している。しかし、五四運動をこのような感情論で評価することが、歴史的にみて正しいものであろうか。また、内藤の

「去年の支那の排日問題は頗る激烈で、一時は我が国民を憂慮せしめたが、其の中事情の変化によって何時となく終熄した。勿論、排日問題は支那国民の愛国心から発したものでなく、公憤から起ったものでなく、袁世凱の時の排日問題と同様に全く煽動の結果であり、之を解決するに就いても日本で支那事情に暗い人々が心配して居る様に、色々と根本から考へて見る必要⁽¹⁾はないとする見解は、前述した辛亥革命期における彼の中国観と、根本的に全然変化していない。逆に、吉野の如き五四運動観を正面から攻撃したものである。五四運動を「全く煽動の結果」であるとするが如き見解は、歴史的事実をまったく無視した理解である。歴史家内藤が、このような見解をもったのは、やはり感情論的な見方、国益に基づく発想に原因があるというべきであろうか。

以上のように、五四運動の時期における、内藤と吉野との中国観は、辛亥革命におけるそれよりも、一そう明確に相違点を描きだすことができた。両者の間の相違は対照的であるが、そのどちらが日本人の中国観の上に大勢を占めるかによって、其の後の日中関係が規定されていくことになったのである。勿論、吉野の中国観にも限界のあったことは前述した通りであるが、やはり両者を比較してみた場合、その相違は見逃すことができない。

註

- (1) 五四運動に関する吉野の論文としては、「北京大学に於ける新思潮の勃興」(中公大正八年六月号)、「支那に於ける排日事件」(中公同年七月号)、「支那の排日的騷擾と根本的解決策」(東方時論同年七月号)、「北京学生団の行動を漫罵する勿れ」(中公同年八月号巻頭語、無署名だが、吉野の執筆)などが、その時点で書かれたものである。
- (2) 大正七年十二月、当時吉野の影響下にあった東大法學部の学生、赤松克麿・宮崎竜介らを中心に結成された「新人会」の機関誌『新人』(大正八年六月一日号)に掲載された。
- (3) 某国というのは、米・英兩國を指したものである。

- (4) 「確信的精神」というのは、ここではナシヨナリズム（愛国運動）の意味に用いている。
- (5) 野原四郎「五四運動と日本人」（中国研究所紀要二）。
- (6) 嶋本信子「五四運動と日本人——同時代の反応と研究史」（史潮一〇〇）。
- (7) 宮本又久、前掲論文。
- (8) 宮本、嶋本両氏の論文をはじめ、栃木利夫「中国革命認識のための試論」（史潮一〇〇）などの諸論がある。
- (9) 吉野の五四評価に対して、直ちに各方面から反撃が加えられ、稲葉岩吉「日支関係論」、沢柳政太郎「日華共存論」の如き、厳しい批判があらわれた。
- (10) 太陽二五卷九号、大正八年七月刊。
- (11) 『新支那論』支那対外関係の危険、一―二頁。

五

以上、本稿では辛亥革命と五四運動の際における、内藤と吉野との中国観を比較・考察してみた。実は、その中間に位置する対華二十一カ条要求の問題をも併せて比較すべきであったが、本稿ではそこまで言及することができなかった。

さて、内藤と吉野とを比較してみた場合、内藤は中国の歴史や文化に対するきわめて深い造詣をもち、当代一流の中国学者であった。その点、吉野は中国研究を始めてから、まだ数年しか経っておらず、而も彼は必ずしも中国のみをその研究対象とはしていなかった。中国についての知識の豊富さからいえば、内藤の方がはるかに勝っていた。それにも拘わらず、中国で発生した重大な問題に対する両者の把握の仕方には大きな相違を生じ、学識の点からみれば

勝っていた筈の内藤よりも、むしろ中国研究の専門家でない吉野の方が、より客観的な、よりの確な理解に到達していたことがわかった。なぜ、内藤と吉野との間にみられるような見解の差違が生じたか、という点については、我々中国史家としても充分に反省してみる必要がある。

なお、当時の日本社会においては、内藤のような中国観の方が、はるかに受け入れられ易い基盤をもっていた。それは国益という発想の上に立っていたからであり、中国の真実の姿を誤解し、中国人の主体性を認めようとしえない考え方であった。その結果、日本人は一そう中国に対する侮蔑感を強め、中国に対する侵略政策をさまざまな形で正当化し、遂には日中戦争にまで発展するに至った。戦後二十数年を経た現在、わが国と中華人民共和国との間には、まだ形式的には戦争状態の終結さえも終わっておらず、わが国にはきわめて根強い中国敵視観が横行している。東アジアにおける戦運が高まっている今日、我々は今一度、正しい中国観を探究しなければならぬのではなからうか。

註

- (1) 対華二十一カ条要求を、吉野が全面的に支持していたことは、大正四年六月に書かれた『日支交渉論』によって明らかである。この点については、宮本又久、前掲論文で詳細に論じられている。

〔追記〕 本稿は昭和四十三年第一学期の始業講演の草稿に手を加えたものであり、すこぶる意にみたないものであるが、やむを得ず発表することになった。

Résumé

Japanese People View of China

— In Case of *Konan Naito* and *Sakuzo Yoshino* —

Yukio Yamane

The relation between Japan and China had been very close for a long time in culture. But after Meiji Restoration, as Japan had learned to take in Western civilization, Japanese people began to look down upon China with contempt. Especially after the victory in the Sino-Japanese War, the tendency became remarkable.

The author is going to examine the opinions of Japanese scholars who studied China at that time. So the author takes up a historian, *Konan Naito* and a political scientist, *Sakuzo Yoshino*, and attempts to compare what each of them regarded the two serious events — the Hsin-hai Revolution and the May Fourth Movement — in Chinese modern history.

Naito would not understand at all the new political situation happening in China because of his old view of China only viewing it from the point of national interest. On the other hand *Yoshino* tried to grasp the tendency of political reform in China just as it was. Specially in regard to the May Fourth Movement he showed a very precise understanding.

In Japan of those days, however, the understanding as shown by *Naito* was easier for Japanese people to accept. Because it was derived from the Japanese national interest. The author concludes that the reason why the general point of view of the Japanese people for China was distorted, was that it was based on the national interest.